



還  
寘  
紙  
料

下

15  
102  
2止

























天和年中菓子店の者扱小仙臺糞と大所流小書より

不三いと讀里又 **ろ** 如此あるものり俗小の道明寺より元禄のはより鳥二三羽

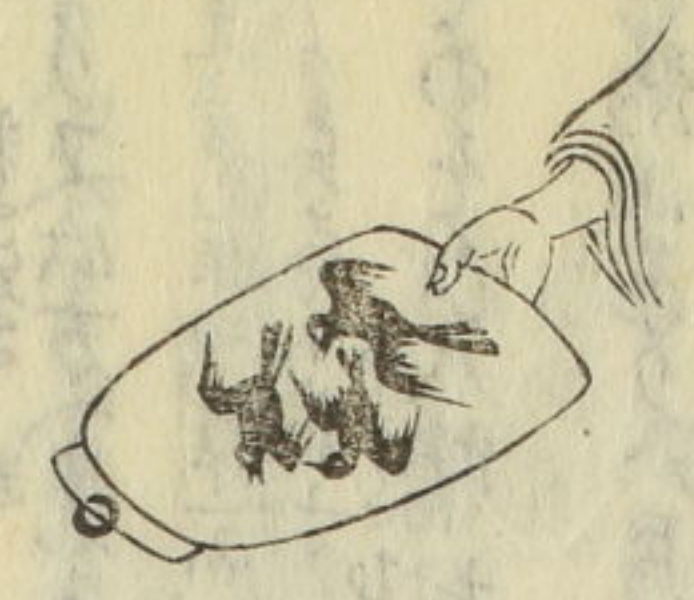
画き本字と矢の傍ぬより後の方小仙臺糞との判を揮て重言小ホシイとを皆原

と矢の」とのゆとんえり按ずる天和より前には者扱のとわり

江戸大坂通馬延宝八年印本

前々 附々 仁 羞 糞 夏を きのり

延寶のはよりかの大所様小書者扱と俗の鳥とかりひしを調和の俗説とて



遊蘭齋の画の遠の与作との草紙小... 我衣のりひかんたんと日とて上模し圖の當時まされくも見知り者扱

三 酢の者扱三種

酢を高く家の者扱小三種の其一種ハ瓶の形を扱て彫たるなり

小酢賣の傍小瓶をよまると是酢を賜る器なり其形より出てあるなり

者扱あり 元禄元年印本 延訓往來繪抄 元禄三年印本 又一種ハ小竹とあそび

たるものありとを今奥羽の街道又駿州府中ふわりと使す

のむ筆貫と酢と通し 言例の隠語ゆくと是も古たりのやうふ

草紙と日とを 慶安四年印本 万間書秘傳抄 小八月瓶の名わり

はくり曲物なり是ハ俳諧の勺小も日えと其圖とわはめて摸し出せり

とあり享保 元年の 酒屋の者扱小矢管と出せり

とさそんがう砵屋のかんえんにまわりの底の母あや

醋の者扱小篩の底のぬけをさけ又六門の帘ぬれ津東の人の津やひらん



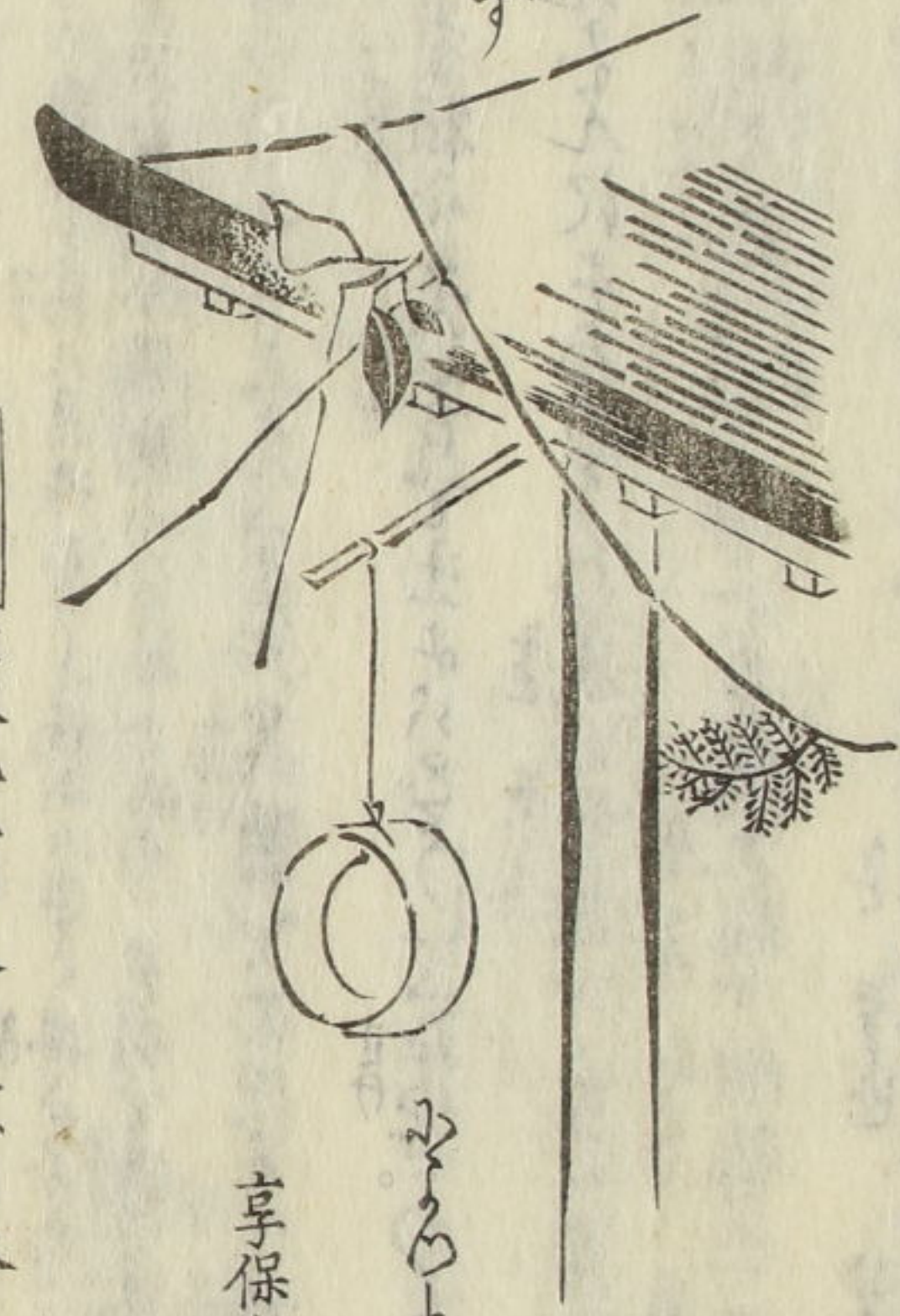
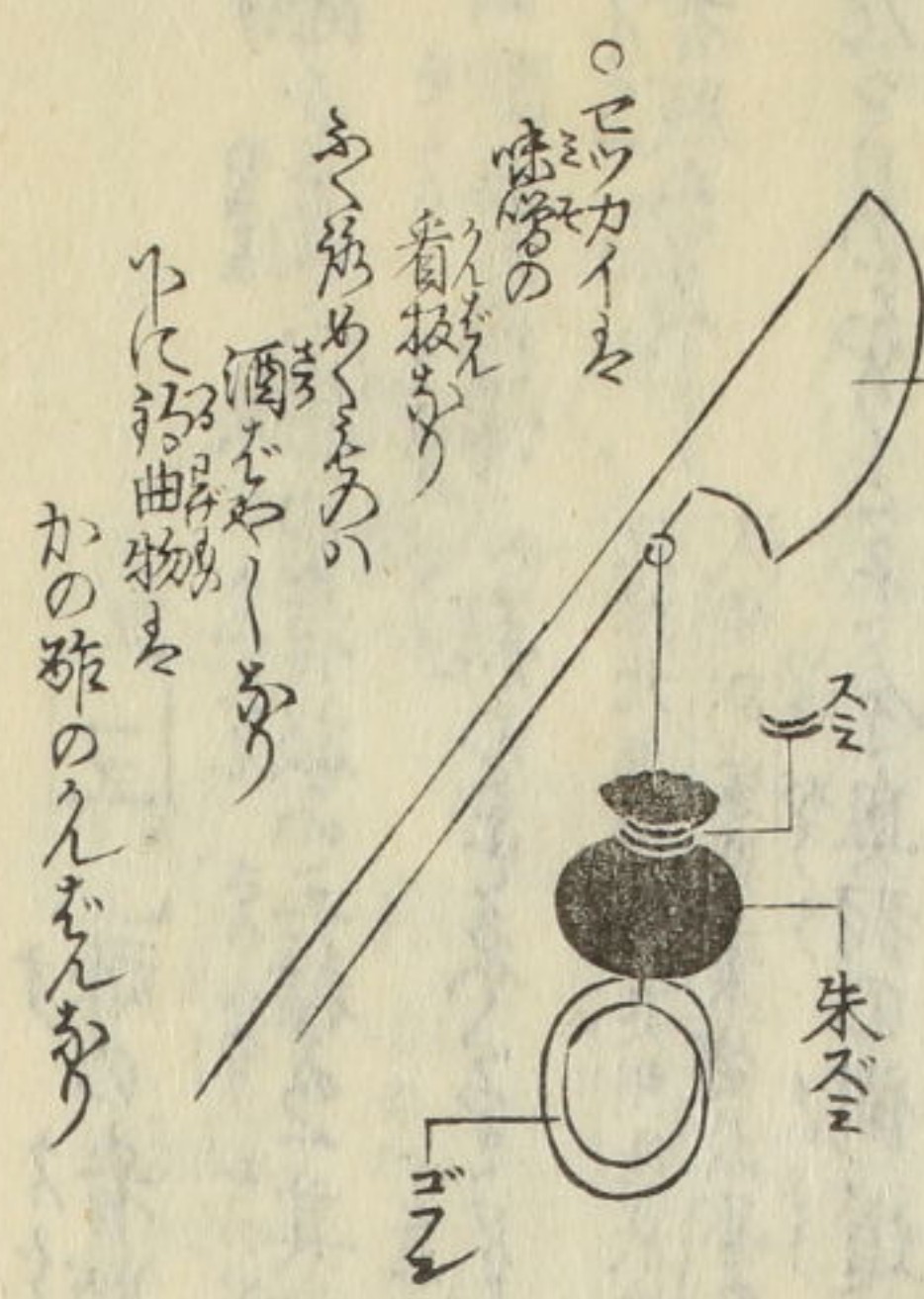
酌の香版乃圖

俳諧の書小を採らん  
圖のふきも總す  
あふ小深

○寛文の法画る小屏風小  
たのしみの圖あり  
画人の名ありんえ  
ざれと

探幽の  
門人の

筆のしとを



○柱のうけ  
千翁か歳且帳あり  
篋角を不角が  
門人あり

享保十七年  
印本 柱のうけの図あり

國の花室永元年印本非採びの巻  
すきかきを瓶の香板と空法明 支考  
のふ不深の白小仙ありてはわあせく月と

三尺椽室永二年印本支考撰

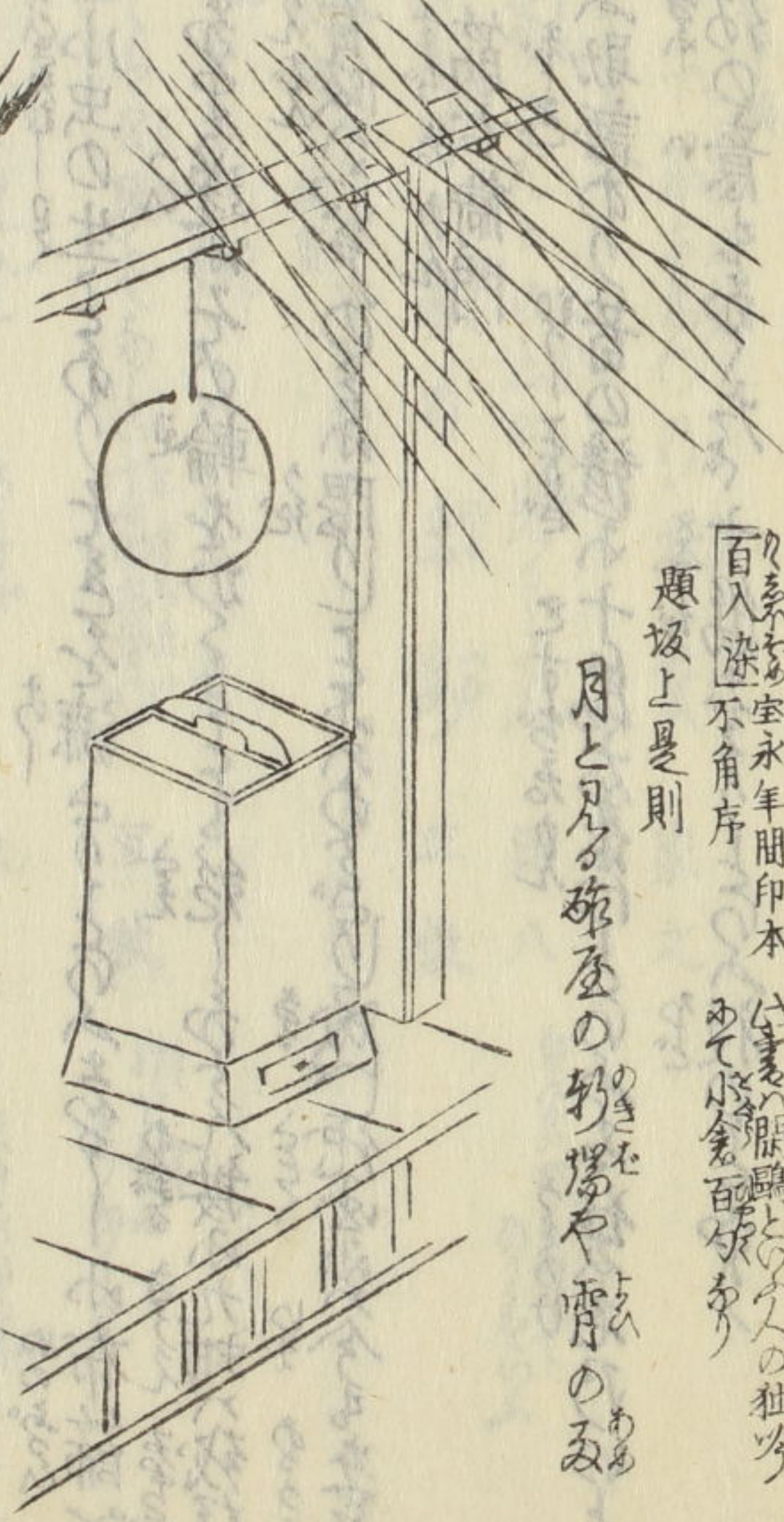
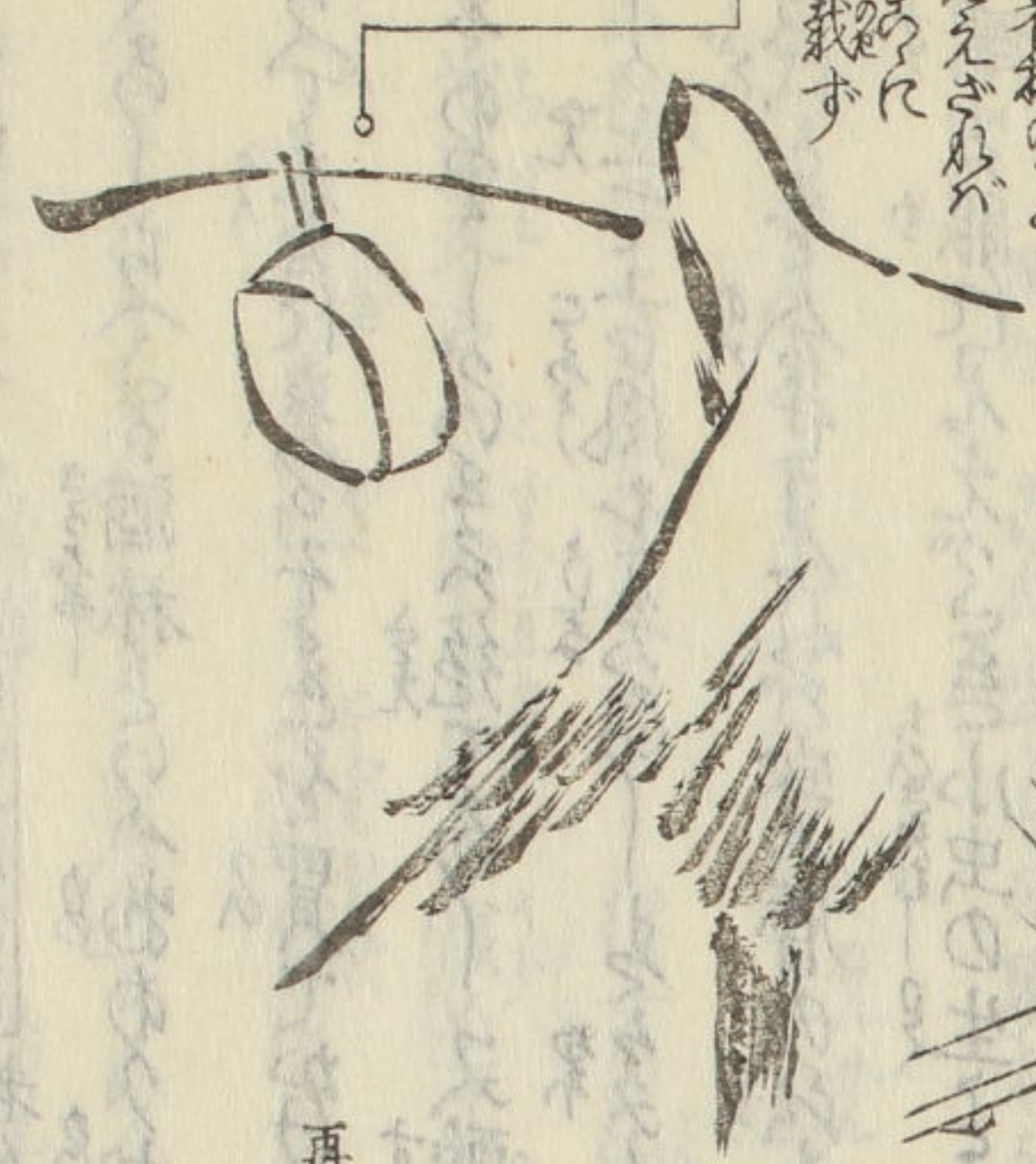
前々川松小然くすす時を濃まて 昌白  
附々瓶の香板とあふぬがちたり 水甫  
○はりの瓶のふかふと紙がはかんをんのことと  
まふがてとて 本朝文鑑 國の花と  
のふ不深の白小仙ありてはわあせく月と  
壺の上のわらわらさうふあゆを

○此圖享保十七年印本

俳諧會之衆小あり

○此書ハ能の程えに  
瓶のふ集りて  
瓶のふ集りて  
あふ香板と

○此書ハ能の程えに  
瓶のふ集りて  
瓶のふ集りて  
あふ香板と



○此書ハ能の程えに  
瓶のふ集りて  
瓶のふ集りて  
あふ香板と

生身魂

○此書ハ能の程えに  
瓶のふ集りて  
瓶のふ集りて  
あふ香板と

再披ふ  
俳諧世話書 兼應三年土佐國任皆虛撰  
明曆二年印本一名世話燒草

附意持菊のふぬとせく 酌屋の印とのこと  
あふ香板のふぬとせく 美應のふぬとせく  
百七十年のむくしを



云「あや近く口をえらるる」中古風俗志明和元年小日「昔々酒屋の杉の葉をて毬  
 のぶくちのらへる酒林といふ物あり尤九月ある新酒のくさる時分必田舎り  
 ありらて葉に束をりてをを買てかけたるさう」近年まで本郷のすゑ四ッ谷  
 魚小舟のまゝ一がのまゝ絶てあり又酢の肴版小舟のきをさへおき一がのれも  
 いはらう止で古風を失の「まゝさう」との人事を裁るふ前小抽出せ「生身  
 魂の時代とを合せんれば寶曆のはまをわさう」肴板あぶるまこと今知る人  
 すは醋の眼にんえさる小虫の生とのりそを漉しとのみさる「小布節と  
 掛おろし」がのら輪をうりとのり遂小その輪をかきとも絶てあえ按小九疋八致は  
 あり支考ハ弟(彦)とまがは看版ハ江戸のまふ限り」とあわぶひ(彦)「他は必今もま  
 四 十筋右衛門  
 物を弄する右衛門といふ助語わり昔の彦小十筋右衛門といふか髪を乃いと  
 すゑのれとて右衛門のゆゑの意もあつた十筋右衛門といふ殺のともあり

新編大矢数集 万治三年撰

西鶴大矢数 延宝八年四月吟

前々 月々 夜々 ぎんりのふや 源八 ぎんりのふや  
 附々 十筋右衛門が 源八 正俊  
 前々 ぬけ糸のふや 糸もわらへる 先  
 附々 あれめてる公 思もあはし 十筋右衛門の 亘秋 糸と髪  
 家之

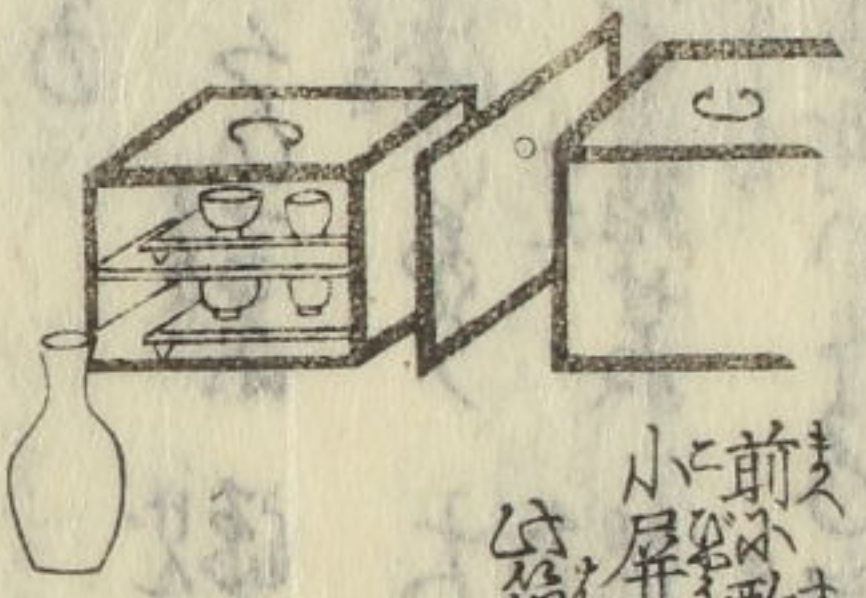
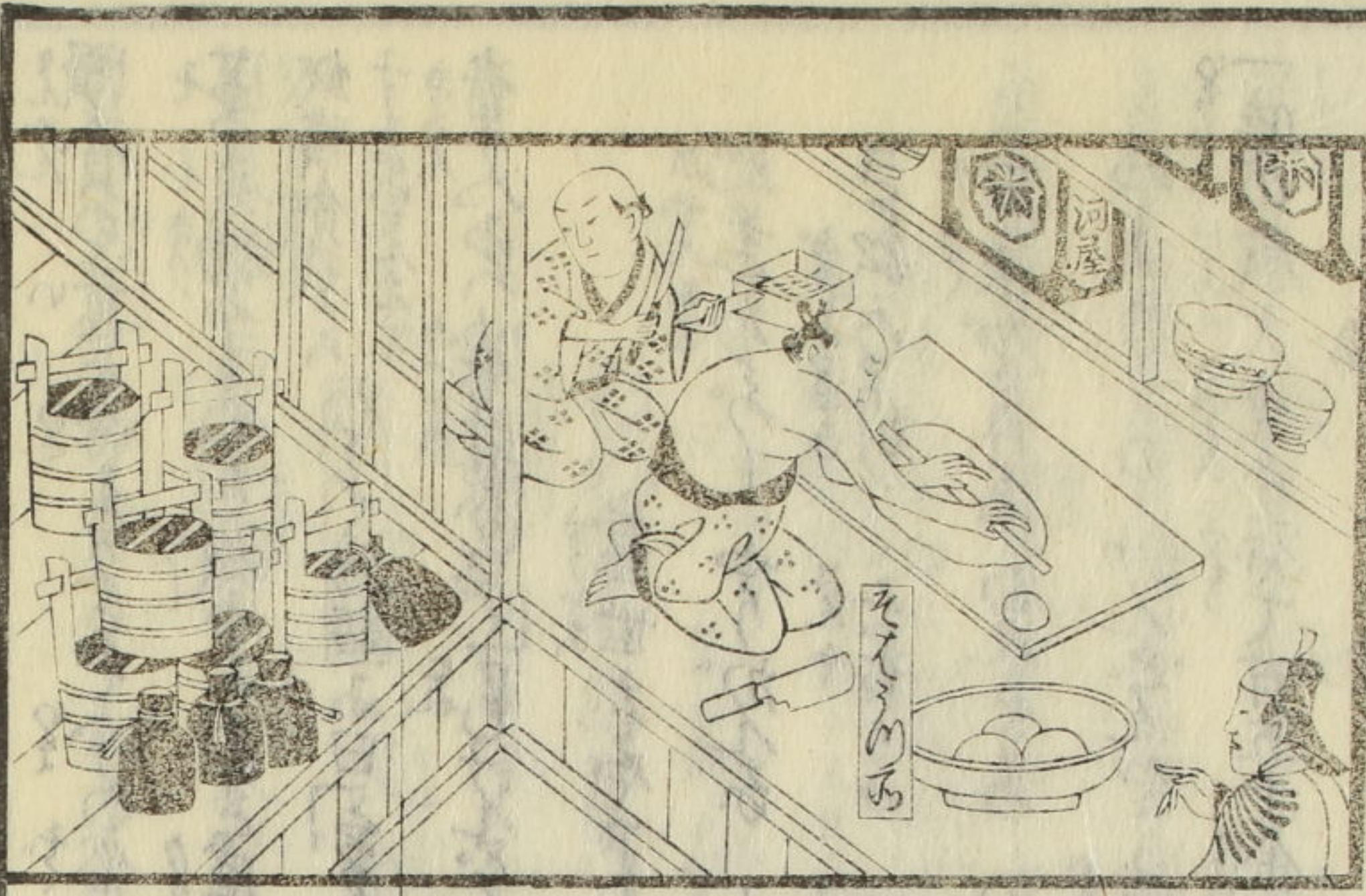
万治中の夕小足えさる百六十余年前此諺のまゝとあぶ西鶴二代女 貞享三年印本  
 三の巻小髪のまのまきさるの「む女の泪小」見「見」をさといひさわど死あかかひのりくはう  
 かわりて地影友も十筋右衛門の「恨」に被さるるに被さるる云「又」西鶴大全 貞享四年印本「髪」  
 ある老人「まゝ」のまほより子供大勢はきて十筋右衛門のくさるまゝ人々に腹をくさるおのれ十  
 一筋右衛門のくさるまゝをさうとのり「咄大金」の「予」か此紙料を彫る「橋」を彫るか  
 扱めて 菱川師直 江戸の軽に「まゝ」あり 在合揃 元禄年間 小 糸の此六十とすれて七十に迫る







風と日と天と地との物のあはれをいふものなり。前編の序文に「むす物語小寛文四年けいさく」  
 切といふ物出るといふ酒餼論も寛文中の印本ありむす物語小寛文四年けいさく不違



上ノ摸寫ノ酒餼論小寛文四年印本  
 温燗桶ありて其の質素なり其の形も果の如し  
 後年繪小寛文四年印本  
 前編の序文を摸寫す寛文四年の  
 小屏風にけん屋と画たるものあり  
 公箱あり酒餼論の棚ありけるもの  
 箱の蓋をわけて裏のさすの  
 見えざるものに摸寫し出せり  
 今の製本かたよりす  
 伊諸艾香延宝年間印本  
 前々 津一ツ万氏を賞讃す 似春  
 附々 けん屋の書やふは井のあり 挑青  
 是延宝中の吟多上の圖の棚ありす  
 江戸鹿子貞享四年印本  
 見物屋 櫻町市川屋中橋大分町桐屋  
 同撰重 堀江町ありや本町 杉橋公雲町  
 元禄二年の江戸鹿子ありぬあり

○撰重と江戸鹿子小寛文一名を大 慳貪といふ鹿悪ある藤陰と 又青貝の序文  
 撰重といふもの正徳のはまでも流行てそ後今小存好夏の人茶簞筒等小用ひて  
 人の知るものありぬと不圖を摸寫す  
 冠附天神花

非諸花ありと 享保十四年印本 常陽撰  
 前々 たぐのり 明々 けん屋 一ツ 長水  
 附々 けん屋の標細ハ 着て秋抄 雪凍  
 青貝の着るをの享保のはよりけん屋の撰重の絶り

○燕蕎麥切 かる口男 貞享元年頃 一巻  
 氣をたたくる藤巻町ありて馬手もそを切屋  
 かんろりのむす物とていふもの一杯六文あり糸通むす物切の根本とていふもの  
 下小寛文の序文あり との小寛文又西鶴一代女 貞享三年 五の巻蓬葉小女の  
 浅草の序文あり 美食好鶴屋の饅頭川屋のむす物 小濱屋の茶酒



京都四條  
川原画巻

延寶天和頃の古画



梳屋の痛辨標木條の仕込每出當  
 兼當座のこ下小全を  
 鹿子をか  
 元禄三年  
 浅草初巻  
 印本  
 鹿子をか  
 元禄三年  
 浅草初巻  
 印本  
 鹿子をか  
 元禄三年  
 浅草初巻  
 印本



亭主が白かちの看板にむしそま物と書はけり虫をのりてまらるるをむしはけり  
ちのり代物へるまらるとのへ徳志のゆふそのきふが我らをや油虫小ちのりて飯  
摘意とゆふ話あり貞享元禄の法も蒸たをぬる人多うりあべり今も麦  
修文とゆふ話あり貞享元禄の法も蒸たをぬる人多うりあべり今も麦  
切を盛器小蒸籠を用ふるまらるる此餘波に

○慳貪飯 江戸鹿子 貞享四年 食見頻 金龍山 品川 かのりや月丸かぶ屋目出  
と並へ出せり 金龍山 又 西花万葉記 元禄十年 京三條繩子 茶屋慣食并当とゆふ  
かあぐのりて他処持のゆふの名あべり

花千句 延宝三年 印本

前々 附々 慳貪の夜 遊 正立 季吟

のり京師ゆてのりあり 万葉記 及四條川原の画巻小わのりせ見え 又 元禄曾我物語 元  
十五年 六の巻 三谷通の路の更とのり條小 ちかち九屋 どのあひまがそまのりせ見え  
印本 盃けんえあ茶のりけとゆふ云 按る小 江戸鹿子 小な良茶屋と別小出せけんえ版と

奈良茶と異あべりけんえとのり流行てあまあ茶ゆもそのゆふを負せあべり

吉國 正徳二年 近松作 とゆふ淨瑠璃節小 小半切のけんえ酒 とゆふもけんえのるを假て今

のり居ぬのりて幾まて書るあり 貞享の 江戸鹿子 小見頻の字を當る見ぬ頻く  
頻く意あべり 是却て附會の説を延寶の草紙に慳貪と書る也 予ハ其説と取

江戸地々 延宝七年 印本 言水撰

花あべり 江戸鹿子 小見頻の字を當る見ぬ頻く 調吟

○都風俗鑑 延宝九年 四條川原のり茶の更をゆふ條小 ちかち九屋 どのあひまがそまのりせ見え

のりて或るちまとのり陰磨と名付 慳貪野良とのりかばるあり どのり更を載又魂接  
元禄年間印本 江戸依 小上ちまま指さるる玉神 かのり居 空茶けんえ 小尚まて云 どのりあべりけんえ

とのり端傾城のりて野良ゆものり遊女ゆものり品とのりを慳貪とのり更彼  
そま切のり移す中音まて遊里の地名もゆびりとのり或草紙けんえのり各女  
より起すは蕎麥切小負せりと記ハ信ト云 又 新歳師前 元禄十五年 熊谷女編 印本







按おしす小見寛文末のゆめて彼から坐まが江戸ゆて愛めされ一刺さの吟ぎん又また古今役者物語  
 延宝六年 小こさて又また右みぎを源げんた徳とくの女に方の初はつとて畧りやく若衆わかしゅかぶさ磯いそとありこれ尾張おわり母ははを  
 花はなの類るいも色いろあうて香かのこまこふ異ことあふままさてそそららも相あひ續つき流ながままもききた玉たま川の  
 せんせんののああううむむ心こころ王おう膳ぜんとて野良若衆やらうわかしゅのああままりり云い千せん之の丞のと先せんの上のままといいひひ  
 ころまああのの夕ゆふ小こ船ねぶな二編に編へんゆゆ此こ冊さつ子しと江戸えどの因いん取とゆて寛文延寶中抄ちゆうありはに  
 ながさながさ狂言きやうげんの繪本えほんありありりかかののああままささととままががるるせせととののああままささのの安やすががううひひのの園ぐわんわり  
 すすたたととししゆゆてて出い出で

花洛六百夕延宝八年印本

友静 友吉  
 蕨夕 友吉  
 ワキ 友吉  
 友吉 友吉

剗野老 小見えさる堺町の圖  
 奥書 寛文貳天中甚吉日 返油町 ます屋平板



尾陽戲場事始 天明二年 小日「寛文五年己巳の秋橋町重町ゆて狂あままのの似に似になり  
 ちち又また松まつ本もと名な々々ののちち又また玉たま川がわ千せんとと遊あそ 河内通かわたうとひひくくいいややととあり  
 尾張おわりののかかががききのの巨こほ細こほ裁さいなり

尾陽戲場事始



西鶴大鑑 貞享四年 五の巻小云 七玉川のわろ小鳥の名も千と巫がむう。風流の奥

はるるをうつて涙の出して家科の所簾とわけての面影実の女井筒も何とて

是れゆらまはるるべき十代の妻よりも都の舞臺とあまそめは十二の大厄まで振被

ぎて一日も月をたわむるねと末の母の若女形もよふわらぶ。河内通ひの狂言

なつり二年が間江戸の人をわびせ終ほめ草野良虫もよはけ魚の古文をわびせ

虫云 野良虫あふええ 又同作 日本永代蔵 元禄元年 二の巻小玉川の巫女方しては

通ひの狂言一番を一日小判一両小さる一年三百六拾兩の取ぬるを仔細(引)の死

こころむうの舞臺衣裳も洗はせ 是等の冊子小河内通ひのふか則高安通ひ

借友吉がふ小まきかあふらてと附西鶴のあふ声と書こぬがまきと死とあふふ

わろ都ど小唄のよみゆてわらう あはれ摸く画の標注小又えとるが波河内を

の唱歌あり又都く物後ゆらふ 六千のゆら 享保よりゆら寛文 祢宜町程云々

門庭たりのやぐらふ小まきかあふらてと附西鶴のあふ声と書こぬがまきと死とあふふ

主膳あま等も祢宜町ゆてかまきかあふらてと附西鶴のあふ声と書こぬがまきと死とあふふ

家合をて加賀節とのみ歌をうこひはせとのみ夏ありはる安通ひの小唄のか

加賀の節ゆてうこひはせ 加賀節の事 俳諧古道具ゆらまき

又案ふる小 吉原讚朝記 寛文七年 吉原の花女を評して 玉川千と巫小他よりと

のこもははれも心をほけてゆらふ千と巫下りのあわ撈て他はくべとあふと答て曰

今の千と巫ゆらふも他ははあふの巫が若くまきとあふ小似たりとのり見ハ遊女の

ことをゆらふと寛文七年のゆら千と巫がや表証とせよ 〇こてもあふ巫没年定めて

俳諧武藏曲千春撰 季吟序

前々 吟を 善を 善を 千と巫。 一品 附夕 後ケバ 秋風

見天和二年の印本えあふの巫ははれぬ 吉野の花女の 貞享元年印本

野良三座託小玉河千と巫と評して 何れをまきとあふの千と巫ハ天和中小没するなる

とやうな評のゆらうのやとまきとあふの千と巫ハ天和中小没するなる







ふさうらんつし... 通油町本問屋開板

延寶六年清め日 通油町本問屋開板

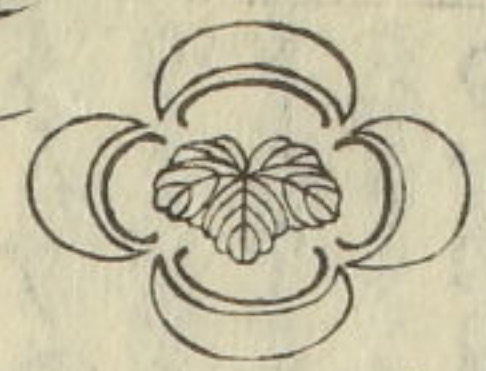
役者物語の興書... 延寶六年今文政八年...

野良虫 剝野良の二本と

千文燕の綴り...

俳諧雑巾 延宝九年印本 常矩撰

此句も千文燕主膳...



○近年刊行あり... 冊子小天和元年...

七 柴垣

明曆の... 柴垣... 此項北國下部の米搗唄... 歴歴の會合...

東海道名所記







時花きこり 寛文の著流の流く 秘多のいせとて 是もがそりいねと年よりし 侍る  
さても母も慶のいそを今あひ合せ 宗恒 踊りまわつてうと 殆ど小室のゆも知らぬ  
とすも何をいうてもあまのぢやのいふ云 又云 千風か 行脚文集 一の巻 加州金澤の  
文小 燕樂の加賀節もは 附あそびのいふ 悲哀の宗恒 早歌を遠く 廢して 吟人  
あはれあゝ 天和三年の書る文あり 一代男 小合を考あふよりの山嶺をわ  
天和の比廢すこと必せり

俳諧夕兄弟 元禄七年印本 其角撰

前夕略 宗恒 けいも 巻乃 神叔

獨鈷鎌論 宝永中印本 小 正保元年著 小琴のこととての條 小 匠ぞの比より 筑紫樂と  
とやいふん 百年の昔のいふく 廢すと 是等の冊子を引ても 知るべし  
因云 匠の草 同二年刊 小琴のこととての條 小 匠ぞの比より 筑紫樂と  
いふとわめてひさるるそれ 匠の比のいふの 匠の比のいふの 匠の比のいふの 匠の比のいふの

筑紫やうせも樂もまのてすやさか少くはかううん小 小室のゆも知らぬ  
とやいふん 百年の昔のいふく 廢すと 是等の冊子を引ても 知るべし  
因云 匠の草 同二年刊 小琴のこととての條 小 匠ぞの比より 筑紫樂と  
いふとわめてひさるるそれ 匠の比のいふの 匠の比のいふの 匠の比のいふの 匠の比のいふの

八 江戸酸漿

案内者 寛文二年印本 四の巻 七月七日 東西本願寺の花 東西とて小對面所の  
簪小まゝなる 造物籠小さま 桔梗とていふなり 男郎花 仙翁花 蓮花 廿何葉 百合  
花とていふなり 百日紅花 杉の葉 莎荷 射干 草等 をのりて さまざま 年々 綴り  
みま鳥獸を 作りいさはるるを 江戸酸漿子とて 七月 ぬ色のあはれとて ぬ出

江戸酸漿



しつと緑色の物とせ」といふ夏あり寛文の初めをきよとのふけ江戸にけき  
万治のころよりわきわき **俳諧毛吹草** 寛永十  
五年撰の季寄八月の條に鬼灯を  
とりの **案内者** ぬいふまのろとんぬ七月小色はく鬼灯も万治前あり

**江戸新道** 延宝六年印本 言水撰

聖乃 びみやすをに吹くん 吹く鬼灯 心色

柳亭云はる **江戸廣小路** 中々上の五文字ありある風とあり

**洛陽集** 延宝八年印本 自悦撰

R ね乃 かりやあえん 江戸鬼灯 琴風

江戸にけきころのうほうきゆきに口紅をさうなるのきあはれと

**空林風葉** 天和三年印本 自悦撰

女奴 ぬい 吹く 鬼灯 や色あのみ 山川

洛陽集 空林風葉の二本と京師の俳書あり 好問堂藏

いま丹波鬼灯の名をいひて江戸鬼灯の名をいはず 今六月より色はき  
たる鬼灯のふ是則江戸鬼灯をいはず江戸鬼灯を絶て丹波の國の種

をりと多くて極まるを絶て

九 稻荷岡附 小砂より

**松の葉** 小載る「月見」といふ小唄小「かちでやれあやうとせをり通ひ」まらぶ  
小石取 池 片枝 枯 皂 夾  
さうさういひのあかまかえうれさうさうもやましく 意にやせさうそや  
いふまご 稻荷の岡小るのまごも 君をおのりバノウ。手編笠とての松をこれ  
ゆきの云 柳亭云か 編笠をうまむおのれかあやう とのま 按むふ北斐川の絵本及古丸  
画卷とるふ小吉も通ひのま弘願山專稱院ありのまの土ふ小娘をう弘願山乃  
雲に合力稻荷の社わりそのうあるゆき小稻荷の岡といひあるべし 松の葉元禄十六  
年の印本あり

**續誰が家** 宝永七年印本 百里撰

前々 ころころと 鏡の 糸を 喰ふり 拾翠  
附々 粉 白た 稻荷の 岡小 銅壺 浦 濟通  
○銅壺浦と泥町の茶屋のまをのい煙のまのわ 風情を彩白と  
はくり 出たの 夕あふべし







天和の法乃画卷此圖の稲荷の岡と云  
 此の額をかりて  
 紙中せまて委く  
 下小引をて専稱院の道哲の

元圖

大徳の赤菴のまことの  
 山廻りかたをてる皂夾といふもの

武藏曲 天和三年印本 千春撰

前 法寺舟耳小抄より  
 附 ありてをてるや

映水 其角

受番 延宝年間印本 似春撰

前 かつ尻を差殿をされたる  
 附 々々のわげをを本陸の月  
 又 雲をてては日かやく  
 幕をうこそ 夏木



右小引  
 袖の海  
 異作の教の  
 地名  
 今  
 此

同書漢和

血氣さうんふすその洪似春  
 輕殿 總先陣 靜軒

「や被たてんハ川」  
 かの なるくエの小傍 似春

水比羅目 元禄十年印本

鏡の人のあはれむ  
 鏡の人のあはれむ  
 今あはれむ

牽續り 艶士

空林風葉 天和三年印本 自悦撰

七夕  
 牛男の空をせたり  
 今霞川 素雲  
 星の半で  
 之をてるの  
 了小比



見聞詩林 元禄十七年写本

吉原八景  
 道哲晚鐘  
 泥湖二挺擲行  
 相共忍入姿  
 坂至衣紋心  
 情亡道哲撞申時







浅草三社祭の番附

十 浅草三社祭の番附

松蘿館藏

浅草三社祭の番附  
三月十八日

○古き屏風の  
惜へ一年号と  
開されども  
延寶天和貞享  
止當時の物あり  
俗に三社権現の祭りと  
俗に三社権現の祭りと  
俗に三社権現の祭りと

三社権現の祭りと  
俗に三社権現の祭りと  
俗に三社権現の祭りと



九三

○母衣武者小  
神事のおまわり

寶曆十一年印本  
又安永八年印本  
前々附自在賣  
又安永八年印本  
前々附自在賣  
前々附自在賣

三社権現の祭りと  
俗に三社権現の祭りと  
俗に三社権現の祭りと



七九



十一 煙草の二服一錢

むく煙草を二服一錢ゆて巻くことわり  
八水隨筆 小云「煙草のつゆまき」  
 ろくくの書小こまぐく小記して日えり予が父弱年の比大坂高麗橋ゆて唐人の装束を穿たる商人舟のきせるゆて二服一錢はたて人小の手をさるうく小録りぬ  
 此話いと後法よりこの書の作者姓名を詳かざれど江戸の士ゆて享保元文中を經るると巻中小日えりその父の弱年の比といふも承應明曆のころの事なり  
 わらん

還魂紙料下之卷 畢



此書稿を脱したるも文政甲申の春より今刻ありて再考せらる  
 説のうへ引をせしむ事いと多し其二三を左小録す

上卷 五 安河孫の條

安河孫にかさるる古き佛匠の名をかりてゆきの巻に小るると  
 ことわり江戸咄小運慶は運慶の名のこゝに脱小あはれ哉り  
元禄六年 雨夜  
 三益機嫌 小上村并舟といふかき治郎は脱せしゆ上作定朝平運慶  
 村々町々開帳盛とほまより定朝をば一糸院の御宇の佛師とせぬ  
 日記板本大文小住せしあはれ大文と号すこと入倫訓蒙圖彙小わり

五 雛の轆の條

柳樽五編 明和七年印本 川柳点

轆でわげろが娘氣よのうす

○雛の扱ふき紙娘の氣にとらるるわおのづる白きり



⑤ 梵て園の條

雷世男 延寶四年印本 蝶々子撰

境町肥後屋より 宗園

福神通夜物語 元禄十四年印本 不角撰

巻一 末一巻を結ぶ 一巻目 備角

寶永三年許六が撰 十三歌仙 小「巻一」は秋を巻き「とらふ魚」は

つゆ何れもそのうは一段ぢやあぢきり後にも巻のふ巻はあはれ末一巻  
とらひしうづりてを原を浄瑠璃よりぞ一知あづべ

下巻 ① 七夕踊の條

玉海集 明暦二年印本

前 燈をくや織夢をやる鏡あは  
付 後とせんいかるとぶりふ

○巻上のふはよ巻とけけたりあふりの知と合をよとふ

後様姿 天和二年印本 言水独吟

前 糸麻ふ 鬼灯ささくも陰も  
付 巻を敷の巻とたゆる巻

おれは夕よ露とゆふとせはきりかくひをふちて秋の夕ふあくと  
のりて巻を敷の巻を敷ある紙あづべ

④ 十の巻の條

續山の井 寛文七年印本 季吟撰

前 ねけてかま 巻わとまあ  
付 かう巻の十の巻の巻がまお横 可全

⑦ 茶垣の條

家の杖 寶曆三年印本

前 龍山連舟乃 後 青李  
付 茶垣うちり 草叟

⑧ 江戸磯の條

江戸磯の條







